

アコンティオスの弁明
—オウィディウス『名高き女たちの手紙』第20歌21-32—

西井奨

1

オウィディウス『名高き女たちの手紙』(以下、*Her.*)第20・21歌は、アコンティオスとキューディッペーの往復書簡という形の作品である。この作品は、カッリマコス『縁起物語』(以下、*Aet.*)によって伝えられるアコンティオスとキューディッペーの物語を題材としている。この物語の概要は、次のようなものである。

ケオス島の美少年アコンティオスは、デーロス島の祭りに来た際、ナクソス島から来た美少女キューディッペーに一目惚れをする。彼はそこでエロースに策を授けられ、リンゴに誓いの言葉を彫りつけて彼女の侍女の足元に転がす。侍女はそれを拾ってキューディッペーに渡し、彫り付けられた文字を読むように促す。そして彼女は「アルテミスにかけて私はアコンティオスの妻になる」と、意図せずに誓ってしまう。その後、彼は孤独に恋の苦しみを嘆く。一方、彼女には許婚との婚礼が準備される。しかしその度に彼女は病に陥る。心配した父は神託を受け、病の原因は彼女の誓いの所為であると知る。真相が明らかになると彼女は回復し、二人は結ばれる。

*Her.*20-21は、この物語においてキューディッペーが何度か病に伏している時に、それを知ったアコンティオスが彼女に送った手紙(*Her.*20)と、その手紙に対する彼女からの返信(*Her.*21)という形で作られている。

さて、この作品の題材となった*Aet.*におけるアコンティオスとキューディッペーの物語は、前世紀に至るまで数行の引用断片からしか読むことができなかった。それまでは、この内容をほぼそのまま散文で書き表していると考えられる、後5世紀の作家アリスタイネトスの『愛の手紙』第1巻第10書簡から、*Aet.*での内容を推測するしかなかった。

しかし、オクシュリユンコス出土のパピルス断片の公刊により、*Aet.*におけるアコンティオスとキューディッペーの物語を直接に読むことが、かなりの程度できるようになった。まず1910年に公刊された*P. Oxy.1011*により、キューディッペーの婚礼の準備から物語の結末にまで至る場面が77行に渡って読み取

れるようになった⁽¹⁾。次いで 1948 年に公刊された *P. Oxy. 2211* により、物語の冒頭と考えられる表現から両者の出自の紹介、そしてキューディッペーの美しさの描写までが、14 行に渡って読み取れるようになった⁽²⁾。これらのパピルス断片はそれぞれ断片番号 75・67 として、引用断片と共に Pfeiffer の校訂でまとめられている⁽³⁾。

これらの公刊と *Aet.* 研究の進展は、*Aet.* のこの物語を題材とし、ここから多くの表現を負っている *Her.20-21* の解釈にも新たな展開をもたらした。特に、エロースがアコンティオスに策を授けた事を述べる *Aet.fr.67.1-4* の表現と、アコンティオスがリングの策略について弁明する *Her.20.21-32* の表現との対応が明らかになり、このことは *Her.20.21-32* の本文の読みにも影響を与えることとなった。*Her.20.27* の行末で、従来、P 写本の *a me* という読みを採るのが主流であった箇所が、*Aet.fr.67.3* の *τέχνην* との対応を考慮して、G 写本の *arte* という読みを採るのが良いとされたのである。また一方で、この箇所の前後の文脈と表現から、ここは *a se* と読むべきであるという修正案も示されている。

そこで本稿では、このような研究の動向を踏まえて、改めて *Aet.fr.67.1-4* と *Her.20.21-32* を比較検討し、併せて問題の箇所の文脈も考察することで、この *Her.20.27* の行末の箇所をどのように読むべきかを提示する。

2

まず、問題となっている *Her.20.21-32* を以下に示す。これは、アコンティオスがリングの策略によってキューディッペーを欺き、結婚の誓いをさせたことについて弁明する一節である。ここでアコンティオスはキューディッペーに、リングに書いた誓いの言葉を思い出すように願い、彼女への恋心が時間とともに大きくなっていったことを告げた後 (9-20)、次のように述べる。

*deceptam dicas nostra te fraude licebit,
dum fraudis nostrae causa feratur amor.*

(1) Hunt, 24-9.

(2) Lobel, etc., 17.

(3) Pfeiffer, 70-84.

fraus mea quid petiit, nisi uti tibi iungerer uni?

id te, quod quereris, conciliare potest.

non ego natura nec sum tam callidus usu: 25

sollertem tu me, crede, puella, facis.

te mihi compositis –si quid tamen egimus– **a me**

astrinxit uerbis ingeniosus Amor.

dictatis ab eo feci sponsalia uerbis

consultoque fui iuris Amore uaffer. 30

sit fraus huic facto nomen dicarque dolosus,

si tamen est quod ames uelle tenere dolus. (Ovid. *Her.* 20.21-32)⁽⁴⁾

僕の欺きによって騙されたのだと君は言ってもいい、僕の欺きは恋心の所為だとしてくれるなら。僕の欺きの目的は、君一人と結ばれるため以外にはない。君が抗議するもので、君を手に入れることができる。僕は生まれついてでも経験によってでもそれほどずる賢くはない。信じてくれ、乙女よ、君が僕を巧みにするのだ。実際僕が何かしていたとしても、僕によって作られた言葉で、才覚あるアモルが君と僕を結びつけた。彼によって教えられた言葉で僕は婚約を結んだ。アモルが法律顧問になることで僕は巧妙になった。この行為に欺きという名をつけてもいいし、僕は策略家と言われてもいい、愛するものを手に入れたいと思うことを策略とするならば。

ここでアコンティオスは、キューディッパーを欺いてしまったのは、もともと自分がそのように人を欺くような気質だったからなのではなく、彼女への恋心、すなわちアモルの所為でこのようなことをしてしまったのだと弁明している⁽⁵⁾。

さて、ここに引用したように、27の行末では a me という読みを、Palmer, Showerman, Bornecque, Häuptli が採用している。これは、*Her.*20 を伝える主要写

(4) *Her.*20.21-32 の引用に際して、本稿で問題とする箇所以外に、読みについて説の分かれている uni (23) や te (24) に関しては、Thompson (1989), ad loc., Id (1993), 258, Kenney (1996), ad loc. に従う。

(5) ここで、自らの巧妙さをキューディッパーの所為にする 26 の表現と、27 以下で自らの欺きの原因をアモルに帰する内容には、一貫性がないように思えるかもしれない。しかしこれは、恋心としての amor と神としての Amor の区別が曖昧にされていると解釈できる。 Cf. Thompson (1989), ad loc.

本 (P, G) のうち⁽⁶⁾、伝存する最古の写本である P 写本 (Paris lat. 8242) と少数の中世後期写本の示している読みである。これに対して、G 写本 (Wolfenbüttel Extrav. 260) と多数の中世後期写本ではこの箇所を *arte* と読んでいる⁽⁷⁾。また、13 世紀後半に活躍した学僧マクスィムス・プラヌデスによるギリシア語訳⁽⁸⁾で、この箇所に対応する訳語は ἐντέχνως 「巧に」となっていることから、プラヌデスも *arte* と読む写本から翻訳をしたことが窺われる。

さてここで Palmer は、*arte* とする読みに関して、*artē* 「緊密に」と解釈して *astrinxit* (28) にかける可能性を示唆しながらも、改竄者が *ars* の奪格形として “by a trick” の意味で、単純に直前の *si* 節内の *egimus* (27) にかけて解釈したのだとして、この読みを退けている⁽⁹⁾。実際、プラヌデスによるギリシア語訳でこの箇所は、

ἐμοὶ μέντοι σε, εἴ τι καὶ πεπλασμένοις ῥήμασιν ἐντέχνως εἰργάσμεθα, ὁ πολύτροπος συνήρμοσεν ἔρωσ.
(Planudes. *Her.* 20.27-9)⁽¹⁰⁾

だが、もし僕が巧みに作られた言葉で何かしたとしても、機知に富むエロースが僕と君を結びつけたのだ。

となっており、ἐντέχνως の位置から、彼は *arte* を直前の *si* 節内に入れた解釈をしている。このギリシア語訳において *arte* は *compositis* (27) と *egimus* (27) のどちらかにかかって解釈されているのが分かるが⁽¹¹⁾、いずれにしても *arte* を *si* 節内に入れた解釈となっているので、*compositis* (27) にかけるとしても間接的に

(6) *Her.*20 を含む *Her.* の写本伝承に関しては、Palmer, xxxiii-xlv, Tarrant, 268-73, Thompson (1989), 28-32, Kenney (1996), 26-7, Richmond, 462-9 参照。

(7) なお、Palmer の ap.cr. によると、Palmer 以前の校訂本では、Burman, Merkel, Ehwald が *a me* を、Jahn, Loers, Dilthey, Sedlmayer が *arte* を採用している。一方、Dörrie の ap.cr. は、*a me* を Merkel の修正案とし、*arte* がいずれの主要写本にもあるかのように記しているが、これは Thompson (1989), ad loc. が指摘するように誤りである。

(8) このプラヌデスのギリシア語訳については、Palmer, xlvi-liiii, Thompson (1989), 33, Michalopoulos 参照。

(9) Palmer, ad loc.

(10) 引用する本文は Palmer を用いた。プラヌデスによる *Her.* のギリシア語訳の本文は、Papathomopoulos が最新の校訂本であるが、残念ながら参照することができなかった。

(11) この *Her.*20 のギリシア語訳の邦訳では、どちらにもかけられるように訳した。

egimus (27) を修飾することになる。しかし *Her.20.21-32* は「もともと恋の手管に長けるほどずる賢くなかったアコンテオスが、恋心(アモル)のためにそうなった」という文脈なので、ここで *arte* の読みを採るにしても、アモルの助けのない状況でのアコンテオスの行為である egimus (27) を修飾するのは不適切である。*arte* の読みにはこのような不適切さがあることから、Palmer は *a me* の読みを採用し、Showerman, Bornecque, Häuptli もこれに倣ったのだと思われる。

3

一方、G 写本の *arte* の読みを支持する要素として新たに注目されたのが、*Aet. fr.67* である⁽¹²⁾。この断片のうち、*Her.20.21-32* との対応が指摘される⁽¹³⁾ のが以下の箇所である。

Αὐτὸς Ἔρωσ ἐδίδαξεν Ἀκόντιον, ὀππότε καλῆ
ἦθετο Κυδίππη παῖς ἐπὶ παρθενικῆ,
τέχνην - οὐ γὰρ ὄγ' ἔσκε πολύκροτος - ὄφρα λέγοιτο
τοῦτο διὰ ζωῆς οὐνομα κουρίδιον. (Callim. *Aet. fr.67.1-4*)⁽¹⁴⁾

エロース自らがアコンテオスに技術を教えた。少年だった彼が美しい乙女キューディッペーに恋の炎を燃やした時である。彼は機知に富んでいなかったから、生涯の間正式な夫と呼ばれるようにとエロースは計らったのだ。

これは、おそらく *Aet.* のアコンテオスとキューディッペーの物語の冒頭の箇所であり、物語の主題が述べられていると考えられる。この後、両者の出自や美しさについての記述が続く (*fr.67.5-14, 68, 69*)。

この *Aet. fr.67.1-4* は、「エロース(アモル)の助けで、アコンテオスは恋の手管を身につけた」という内容面で、*Her.20.21-32* と対応するといえる。そして

(12) この断片を含む *P. Oxy. 2211* は 1948 年に刊行されたので、初版が 1898 年の Palmer や 1914 年の Showerman、1928 年の Bornecque はこれを利用できなかった。なお、Showerman の校訂本は 1977 年に Goold によって改訂されたが、このことには言及されていない。

(13) Pfeiffer, ad *Aet. fr.67.3*, Kenney (1970), 393-4, Id (1996), ad loc., Barchiesi (2001), 121, Knox, 137-8, Cairns (2003), Nesholm, 186, n.316.

(14) 引用する本文は、Hopkinson を用いた。なお、この *Aet. fr.67.1-4* についての考察は、Cairns (2002) に詳しい。

ここでは、Kenney が指摘するように⁽²⁹⁾、アモルが *iuriscousultus* 「法律家」に準えられている。法律家はその専門知識によって人々に「教え」を与える存在と見なされていたので、この表現は *ἐδίδαξεν* と *dictatis* との対応をより強めるものであるといえる。

このように、*Her.20.27* の行末の読みと関係なく、*Her.20.21-32* には *Aet.fr.67.3* の *τέχνην* との対応を見出すことができる。それゆえ、*τέχνην* との対応を重視して、*Her.20.27* の行末は *arte* の読みを採るべきであるという、上述の Barchiesi らの主張の根拠は十分なものではないといえる。

そこで、*arte* の読みも *a me* の読みも不自然であるとして退け、*a se* という修正案を提示する、上述の Thompson の見解が最も妥当なものであると思われる。この修正案は、*a me* や *arte* という主要写本の字面ともあまり離れていない、という点においても妥当である。さらに、*a se* という読みは、行為者であるアモル(エロース)を強調するという点で、*Aet.fr.67.1* の *Αὐτὸς* とも対応しているといえる。

上述の Thompson の解釈のように、*a se* という読みによって、アコンテオスは自分がキューディッペーにした欺きの原因を、より強くアモルに帰することができる。これは、「欺くような方法で自分がキューディッペーに結婚の誓いをさせてしまったのは、自分が生来そのようにずる賢い気質だからではなく、彼女への恋心、すなわちアモルの所為だからである」という、*Her.20.21-32* におけるアコンテオスの弁明の文脈によく合致する。

以上の考察から、*Her.20.27* の行末の読みについては、主要写本によって伝えられている *a me* や *arte* という読みを採らず、*a se* という修正案の読みを採るのが妥当であると思われる。

引用文献

Barchiesi (1996): Barchiesi, A., Review of Kenney (1996). *BMCR* 96.12.1< <http://ccat.sas.upenn.edu/bmcr/1996/96.12.01.html>>.

Id (2001): Future Reflexive: Two Modes of Allusion and the *Heroides*. in his *Speaking Volumes. Narrative and intertext in Ovid and other Latin poets*. London, 105-27

(29) Kenney (1996), ad *Her.20.27-30*.

(=HSPh 95 (1993), 333-65).

Bornecque, H., *Ovide. Héroides*. Paris 1928.

Burman, P., *Publii Ovidii Nasonis Opera omnia*. 4 vols. Amsterdam 1727.

Cairns (2002): Cairns, F., Acontius and his οὐνομα κουρίδιον: Callimachus Aetia fr. 67. 1-4 Pf.. *CQ* 52, 471-77.

Id. (2003): The «etymology» in Ovid Heroides 20.21-32. *CJ* 98, 239-42.

Dilthey, C., *De Callimachi Cydippa*. Leipzig 1863 (Includes critical text of *Her.*20-21).

Dörrie, H., *P. Ovidii Nasonis Epistulae Heroidum*. Berlin and New York 1971.

Ehwald, R., *P. Ovidius Naso*. Leipzig 1888.

Giomini, R., *P. Ovidi Nasonis Heroidae*. 2 vols. Rome 1975.

Hauptli, B. W., *Liebesbriefe. Heroides epistulae*. Zürich 1995.

Hopkinson, N., *A Hellenistic Anthology*. Cambridge 1988.

Hunt, A. S., *The Oxyrhynchus Papyri VII. Nos. 1007-1072*. London 1910.

Jahn, J. C., *P. Ovidii Nasonis quae supersunt opera omnia*. Leipzig 1828.

Kenney (1970): Kenney, E. J., Love and Legalism: Ovid, Heroides 20 and 21. *Arion* 9, 388-414 (orig., Liebe als juristisches Problem. Über Ovids Heroides 20 und 21 *Philologus* 111 (1967), 212-32).

Id. (1996): *Ovid: Heroides XVI-XXI*. Cambridge.

Knox, P. E., The *Heroides*: Elegiac Voices. in B. W. Boyd (ed.), *Brill's companion to Ovid*. Brill 2002, 117-39.

Loers, V., *P. Ovidii Nasonis Heroides et A. Sabini Epistolae*. Cologne 1829.

Lovel, E., E. P. Wegener, C. H. Roberts and H. I. Bell, *The Oxyrhynchus Papyri XIX. Nos. 2208-2244*. London 1948.

Merkel, R., *P. Ovidius Naso*. Leipzig 1852.

Michalopoulos, S. N., Ovid in Greek: Maximus Planudes' Translation of the Double Heroides. *C&M* 54 (2003), 359-74.

Nesholm, E. J., *Rhetoric and Epistolary Exchange in Ovid's Heroides 16-21*. Ph. D. Diss. Univ. of Washington 2005.

Palmer, A. P., *Ovid Heroides. vol.1: Introduction and Latin Text, with Greek Translation by Maximus Planudes. vol.2: Commentary*. new introduction by D. F. Kennedy. Bristol 2005 (Oxford 1898, Hildesheim 1967).

Papathomopoulos, M., *Μαξιμου Πλανούδη μετάφρασις των Οβιδίου Επιστολών*. Ioannina 1976.

- Pfeiffer, R., *Callimachus*. New York 1979 (Oxford 1949, 1953).
- Richimond, J., Manuscript Traditions and the Transmission of Ovid's Works. in B. W. Boyd (ed.), *Brill's companion to Ovid*. Brill 2002, 443-83.
- Rosati, G., *Ovidio Lettere di Eroine*. Milan 1989.
- Sedlmayer, H. S., *P. Ovidii Nasonis Heroides*. Vienna 1886.
- Showerman, G., *Ovid, Heroides and Amores*. 2nd ed. rev. by G. P. Goold. Cambridge, Mass. and London 1977 (1st ed. 1914).
- Tarrant, R. J., Ovid. in L. D. Reynolds (ed.), *Texts and Transmission: a survey of the Latin classics*. Oxford 1983, 257-84.
- Thompson (1989): Thompson, P. A. M., *Ovid, Heroides 20 and 21 : a commentary with introduction*. Ph. D. Diss. Univ. of Oxford.
- Id. (1993): Notes on Ovid, Heroides 20 and 21. *CQ* 43, 258-65.

(京都大学)